明治三十年七月出版

4

71
329

博文館叢書

紀貫之

附土佐日記

博文館藏版

版權所有

205113-000-9

71-329

紀貫之 附，土佐日記

福島 鴎波／著

M30

EDV-0118

土陽叢書發行に就て

之を聞く、偉人傑士の事績を後世に傳ふるは、其人の爲めに黄金の巨像を鑄るに勝ると、吾が土佐の地由來歴史に富む而して事績往々煙滅し世人の知臆するの少なき所以のものは蓋し記錄等の後世に存せざるに基因せしこと少からざるなり、弊舍聊か茲に感する處あり、今般『土陽叢書』を發刊し以て大に土陽の人物事績を網羅上梓せんとす、是れ一は以て故人の美名を顯揚し一は以て後人をして其事實を明瞭ならしめんとす、微力の效す處本より萬の一二に過ぎざるも亦鑄鐵の小像を試む

るに近きものならんが、天下の士夫れ之を諒せよ」

「土陽叢書」續々發刊に就ては土佐に關する古書御所藏文は御編纂の御方は御一報被下度早速御相談に罷出可申候

開成舍主謹述

上梓の辭

鷗波

見渡す限りの峯嶽は秋氣已に充ち黄紅相半し蕎麥開きて國廳の礎石花白し仰きみれは大樹の梢天飈吼して岫を出る無心の雲は峯を抱き巒を舐り池面水肥して鯉魚躍り歌仙の邸蹟苔蒸せり曾て遺蹟に遊ひて王朝の昔に忍ひ歌仙の德を慕ひ戀々の餘り稿を起す偶開成舍に促されて上梓せり歌仙の經歷如何を讀みて味へは一興あるへし

明治卅年三月一日の朝稿を起ふて机に向ひ

桐猫三郎 鳴波

上梓の辭

見渡す限りの峯嶽は秋氣已に充ち黄紅相半し蕎麥開きて國廳の礎石花白し仰きみれは大樹の梢天飈吼ひて岫を出る無心の雲は峯を抱き巒を舐り池面水肥ひて鯉魚躍り歌仙の邸蹟苔蒸せり曾て遺蹟に遊ひて王朝の昔に忍ひ歌仙の德を慕ひ戀々の餘り稿を起す偶開成舍に促されて上梓せり歌仙の經歷如何を讀みて味へは一興あるへし

明治卅年三月一日の朝稿を起ちて机に向ひ

けれは殘梅花の薫りは溢れて書窓に向ひ吹
返す風に掠められし瓶裏の水仙花の香は硯
屏に觸れて珊々たり

自序

清涼殿の月澄み南殿の櫻香しく殿上人の心
て月に似て花の如く平安朝は是れ文學時代
なり貫之の詩も近代の外にありて眼中古人
なく古歌なし聲調の耳を掠めて餘音長く感
情に響くを以て絶調の詩となし俊逸の歌と
なせり故に神韻縹渺の中にあり人界を離れ
んと欲して離れす望むを得て近く能はす貫
之の詩は對岸の花なり而して政治家として
の貫之は蕞爾なる此の時代に意を得さるも

のなり

本稿就るの翌日これを記して自序となす時

に明治卅年二月十九日なり

紀貫之

目次

邸蹟……一頁
施政……九頁
時勢……一九頁
文藝……二四頁
經歷……三二頁
餘馨……三五頁
比江村に趣く……三七頁

目次終

紀貫之

福島鷗波

◎邸蹟

東海道を出還する者西山崎驛を去て東上し東稻荷驛を過ぎて西下せば双眸に落るは奇歟將た異歟連山は東方より北方に轉じて一大嶽を爲し左折して南に出で西方に向へり而して群雲鎖煙は常に山腰を離れず鬱鬱の氣は大平の家を現はしこの面の連山は城壁の如くに聳ゆ五條の大路は其中を通じて碁面の如く一千一百年前の帝王桓武帝相しひて出河襟帶城を爲すとて都を遷されし古都卽ち京都は是ゝ北條京車場に近づけば護國教王寺の塔は南天を衝きて空に凌ぎ東西本願寺三十三間堂の甍は高くして比

騎の如し全都の壯觀を豫想すべく車上風物を評するあり沿革を說くあり評せず說かず深沈往古を考へ暗涙襟上に灑ぐものは讀書の人なり

七條停車場を下りなば美觀は豫想に反して更に美觀なるべし東山は黛描きて整然として起ち西山は髻を結ひて鬱然として眠る相呼べば應へんとす一見よりは一見に勝るべく恰も佳人に接するの想あり賴山陽の詩に曰く東山如熟友數見不相厭と蓋し余輩の意を得たるのみにあらず蓋し征人の意なるべし晨氣青澄あり暮姿もまた紫艶あり端莊として溫和を含み綠玉微珈なし山靈亦斯の威嚴ある歟

桓武帝の御世の京都は街衢端正に規模宏大にして左京右

京の大路を立て加茂川は其中間を横斷せり市街は玉輦と共に衰へて今の京都は左京の全部と右京の小部分を存せり右京は桓武帝の神靈を奉齋せられし平安宮の地にして古の御所は其の跡なりといふ

余乙未の歲事を以て京都に來り古今を撫し遠近に徵し世の盛衰に鑑み感激に堪ゆざるものあり時將さに十月秋高くならんとするに御苑の病葉地に委ね古の官仕のものは古今を語り掃除に餘念なし思ふに王朝の時には平家藤原氏の專橫及び山門の暴擧あり踵で武臣の覇業起り忝なくも万乘の帝王は虛位を保てり名刹古寺の鯨鐘は殷々として霞を破つて吼ゆ昇平無事を報ずと雖も白河法皇の嘆せられしは斯の山門の徒なり當年の感如何あらんや氾濫防

さ難きを以て法皇の嘆れし加茂川も川身瘠せ水淨く連雨と雖も濁流なく深底遊魚見るべく砂礫數ふべし唐土の人云ふ黄河揚子江水清ければ世乱るると加茂川の如き漣光澤影清冽水濁れば世は凶なるべし唐土の人滑を以て世をトし余は濁を採て凶を筮す何ぞ其差の多きや左想右思慨慨に堪ゑず是れ讀書の人なる所由歟竹添井々の詩に人生勿爲讀書士到處不堪感慨多と眞に然り

仙洞御所を拜觀せしに老樹枝長く池面に横へ稚木芳草其間に點在し池魚喰喁して衰莽を吹き禽鳥囀々として花を知らず幽邃中の幽邃なる者嬉々逍遙する者両三回其北面に碑あり苔滑に讀む可らず强て剔げば漸く讀を得たり是れを何と爲す經天緯地の大手腕能く雲煙を醞釀し山河

を磅薄し萬物を陶冶し陰陽を鋤鍬するを以てし天上の清絶靈絶至神至妙の消息を洩したる歌仙紀貫之の邸跡の碑なり其文の要旨には貫之以前に貫之なく以後にも亦貫之なしとて稱賛措かず嗚呼貫之何人ぞ哉官高からず所謂匹夫にして至尊に近く能はざる身を以て死後斯の餘譽あり眞に文豪なり

天上の神靈なる鄉より清絶靈絶至妙至神の消息を賜らして性を斯の人間界に受け文豪と稱せられし貫之は政治家として土佐の國に牧民の職を奉じ來りて在務四年今尚其邸蹟存在し嘖々として雅人も賞し俗客も訪はざるはなし長岡郡比江村なる國廳の跡は斯なれりといふ後名抄に土佐國國府在長岡郡とは即ち是れにて王朝時代より南北両

朝の頃まで國守赴任施政の處にて公衙のありし地なり紀念としては礎石存じ天明年間尾池春水高村貞安同朝海等の建立せし紀子舊蹟の碑ありまた地の字としては衙府中内裏屋敷内裏ノロ等の稱ありて當時を想像すれば紫殿に摸造せしならん

國分川は山間の諸水を集めて東折南下して國分廿枝両村を境にし來り常通寺島村に走れり其水清冽恰も京都の加茂川に酉似すべし加茂川の水源嵐山を去て芹川橋に至りたる頃は國分川の領石附近の潭影に於けるが如く國分川は水極めて美ならずと雖も細波砂礫に潜みて漸く集まりて漸く大に崑石に碎かれて雪花を散し稍々狹まりては草根樹底を嚙みて細く奇觀萬變其比江山を過ぎし頃は法性

寺西畔狀に似たり川の東岸廿枝村字三畠は京都の右京にし左京は比江村なり南方より北視すれば地狹く家屋なく田畝遠く開けたりと雖も其風致地形少しも京都に異なるなし東方の遠山はの東山の如くにして霞煙を籠め比江領石の諸嶺重疊連綴して段々に高くなりて叡山の形狀をなし岡豐八幡の諸阜も亦西山なるべし眞に京都に摸したる者にあらずや地形も亦天然の美形なり故に余は小京都なりといふ之に加ふに常通寺島村附近に放生會川原の稱を殘して放生會を行はれし故地あり貫之が遺蹟として日吉社土佐國廿一社の勸請ありまた觀月の松あり之れに伴ふて滿期歸朝の當時に現はれたる長岡郡大津村及び鹿兒より吾川郡浦戸港を出で九十九洋の沿岸として名を不朽に

存したるもの少からず

貫之平安聖朝文學の隆盛なりし空前絶後の時代に於て獨り錦腸万斛妙想月も及ばず燦爛眩曄光彩陸離花も耻づべく形管一枝麗文花の如く綴り千歳の下克く鬼神をして舞はしめ文士を泣かしむものは蓋一代の才筆にありといふべし

土佐國の舊蹟に於ける公衙官邸は數多の大守來任ある然れども一片の古瓦を得ては紀子の遺物として敬ひ趾畔に遊びては貫之の蹟なりとて尊び殊に碑を立て遺德を慕ひ一として紀子に非ざるはなく數多の大守を說なく貫之を稱するは何ぞや是れ蓋し貫之の才筆にあるにあらず施政の善良なるに依るべし余曾て土佐日記地理考を著す京師の儒者菊池三溪叙して曰く學世嘖々概以歌人者

非深識貫之者蓋皮膚之見耳前史稱承平中貫之起任于土佐當是時盜賊横行氓不聊生貫之首勦討賊巢賑恤孤寡治政謀法粲乎有可見者是貫之之心情なり

◎施政

頼山陽も亦一代の文雄なり其史眼能く及ぶべからず山陽曾て香川景樹が著はせし土佐日記創見に序して曰く按史土佐守以善歌稱其爲人不可概見然當時南海盜賊方起而得任此國在任五六年矣則其間勦賊護民功績豈少觀記所叙吏屬依戀之狀可以知之矣而歸裝中無物可以答其意則其清廉不營私又可知矣數言賊之欲相報無佗曾被勦討故待解官權而報復之也抑貫之の文藝に於ける施政の餘力のみ然れども文藝を以て目せられしは蓋し貫之の心緒に非

おと雖も當時社會の風潮に搖盪せられて餘醫も凡手にあらず山陽の文三溪の詞前後相應映して貫之の心緒を解剖せしは貫之に於ける好知なり延喜より延長承平を經て天慶に至るまで四十餘年間は平安朝の盛時にして延喜は「枝を鳴らさぬ時津風」と謳ひ離され天慶も延喜に次ぐとて賞せられしも昇平の餘韻に連れて弊害もまた甚しく殿上人の柔弱の勢ひ起れり故に一の政治家として見るべきものなし獨り延喜の始に於て菅原道眞あるのみ然れども外物に遮ぎられて終を全ふする能はず次ゐ地方官の敏腕家としては只貫之あるのみ其官歷を擧ぐれは即ち左の如し

延喜六年二月任越前權少掾(御書所預)○同七年二月廿七日任內膳典膳(與宮道潔典相替)○同十年二月任小內

記○同十三年四月大任內記○同十七年正月七日叙從五位下任加賀介○同十八年二月任美濃介○延長元年六月任大監物○同七年九月任右京亮○同八年正月任土佐守○天慶三年三月任玄蕃頭○同六年正月七日叙從五位上○同八年三月任木工權頭○同九年卒

宮中の在職は昇平謳歌の中に沈みて驥尾を延すに足らず越前加賀美濃等の地方官も亦然り是等の三國は近く畿內に接し時津風なる軟弱の氣象は常に歇む時なく國民は又無上の朝恩に浴せり斯の如く世は大平無事と言へども僻在の地皇化の未だ遠く及ぶなく土同讃豫の四國は殊に然りとなす承平の年小野氏寬紀秋津時成等ありて海舶數百艘を浮べ遠近相應援して官物を掠奪し豪家に亂入し狼籍

亂暴國守も亦甚だ其所置に苦む土佐の國別府某の如きは土豪中の最大にして猛惡を極め自立の志あり偶ま氏寛等に應せんとす貫之土佐の大守となりて任國に下り大に治績を勵み賊巢を討除し賊子手を收め四民虞なく恩威に服したり而して僻遠の國敬禮に習はず故に尊皇敬神の道を擴張し國中の廿一社を一殿に勸請し祭典奉幣にあらざる日には朝夕跪拜して尊皇敬神の何物たるを知らしめ博愛の規本を示し風物俗容一つとして意を用ゐざるはなく孤寡を賑恤して皇恩に化せしめたり今土佐國に於て追慕の多くは文藝にあらずして施政なり貫之の土佐守となりしは手腕を振ふの時にして無事の地より亂麻の天を指し來りて亂暴狼藉の地に於て惡を除き善を擧げ風を矯め俗

を正し進化し去て海南また別天地を見るに至りしは貫之の賜なり貫之一身を擧げて斯の極難に處せしは忠慨なり節烈なり貫之は文儒にあらずして政治家なり

忠慨節烈を以て政治家として顯れたる貫之が文儒を以て世に稱せられたるは抑故ある乎是蓋し皮膚の見にして貫之を知らざるなり

唐の李白豪膽なり滿胸の俠餘霸氣は抑ゑ難く中原援々の時に當りて以て奇功を試みんと欲し魯仲連張良韓信東方朔等を景慕し自ら身を比し天を仰いで天を笑ひ地に俯しては地を嘲り人間を平視して蜉蝣の如く卿相を凌轢し豪傑を哂嘲し万乘を見る僚友の如く儕列に似たり倜儻自負豪邁自信滿胸の覇氣滿眼の俠餘の溢るゝ處發して詩歌と

なる其辭金石其の詞奇拔雪の如く高潔花の如く純美なり天子も亦之れを知り万乘の尊きをも忘れて羹を調へ高力士は朝紳をも憚らず靴を取る而して沈香亭の燕宴に陪するや游平調三章を進め胸中の錦繡を揮灑し去る斯の如く天子は其才を愛し朝紳は其の智を賞すと雖も用られず韜晦身を竹林に隱し遂に長安市上の酒家に眠る

韓愈は是れ奇慨なる士なり新羅織錦は藏めて胸中にあり感起する處一種奇靈の怪芒異彩を放ち來り人をして敢て逼り近く能はざらしむ其文章は唐宋兩朝作家の主領となす氣焰一たび發せば天子朝貴と雖も避くるなく直言讜論の侃々として屈せず佛骨の表は氣焰高かりし時の稿忽ち忌避せられて潮洲に謫せらるゝや晏然として雲横秦嶺雪

壓藍關の一律を賦して行く其行偉なりと謂ふべし其論鋒の嚮く所堅摧けざるなし峻悍凌厲畏るべく峻曾嚴に似たり物に觸れては眉昂り神激し怒張人を壓するの氣あり此の氣を以て終始事に從へり驅鰐の文能く其暴を馴し民依て安し韓愈も亦政治家なり

李白韓愈斯の性行あり安寧無事の世に際し政事を論ずるものなくして餘藝に沈めり貫之も亦斯の如し貫之が治謀政法は韓愈に對峙し其政治家なるを得ざりしは韓愈李白と俱に論ずべし貫之の勅撰歌集に預り斯文の模範を示し韓愈が文八代の衰を起し李白の詩唐調の本體を示したる功は携映して聊も讓るなし貫之の當時に於て遊惰の風に浸染し姑息偷安勇氣沮喪せし者と同じく論ずべからず貫

之は是れ神を幽遠に馳せ想を閒寂に凝すの徒にあらざる蘇東坡潮州韓愈の碑文に曰く文起八代之衰而遂濟天下之溺。忠犯人主之怒。而勇奪三軍師と余貫之に於ても亦謂ふ菅原道眞は儒林の家に生れ成童にして文藝を以て四隣を驚かし父祖に繼ぎて儒臣となる偶々宇多上皇に拔擢せられて輔臣となり裁決流るゝが如しと稱せらる然れども文藝秀逸にして文に詩に歌に遺稿として見るべきもの多く儒林の泰斗たり其朝に在る類聚國史及び三代實錄の著あり遐去するや文學の神として都鄙祀らざるはなし然れども史を誦するもの演劇を見るもの文客俗人の別なく多くは儒士として願るなく寧ろ政治家とせしは何んぞや一朝々に立ち外物に退けられ西海に竄流せしに依るなり

南宋の末年に當り奮然國難に殉ふもの多し文天祥儒學を以て著る奮發立て國難に當れり其正氣歌は精神の溢るゝ所其詞奇慨愾夫も之れを誦せば奮起し俗士も之れを讀めば感奮すべし德川幕府の末水戸の人藤田東湖韻に步してまた正氣歌を作るこれを和漢の雙美と稱すれども正氣歌ありて天祥を知る少く慷慨家として稱せらるこれ國步艱難に際し殉死せしに依るべし

嗟何ぞ世評の劇なる菅原道眞文天祥等は文才あり俱に一世を震起すべし忽ち流離顚沛の閒に處して政治家と稱せられ李太白韓愈の政謀あり人之れを知らず徒らに文儒と稱せらる斯の如し然れば世の濁清に依るか實之の如きも亦然りとす其偉績傳ふべく賞すべきものありといへども

人詳かにせず慨嘆すべし。

貫之延長八年土佐の守に任せられしより其任にある凡四年承平四年の十二月滿期歸京せり其任國にあるや其形勢に憤慨し身命を賭して盡す所あらんとし危險の局に進み粉骨憂色なく護國の鬼となるも顧るなく至誠によりて起ち至誠に由りて動きたるを以て善を人に施すときは怨を敵賊に發すべし貫之歸朝海賊の襲擊に注意したるは其用意周到にして恐惶を說くものにあらず暴党の怨恨を報い來るを知ればなり南海亦事の多き叙山に登り平將門と俱に皇城の宏大を羨望して異意を畜ひし藤原純友は此の時に叛せり別府某も內應したり然れども氏寬等の如き暴を加へる徒少かりしは貫之の政謀に出しなり貫之の京に歸

る海路險惡容易に行くべからず承平四年拾二月廿一日より翌年二月十六日五十余日を經過し纔かに京郊に到り山崎に駐まる累日舊宅荒廢し自ら經理して漸く歸るを得たり朝廷賞せず官木工權頭に老ひ位僅かに一階を進むを得たり山陽曰ふ政府私家俗貴門地彼以儒流孤立坎軻其抑鬱爲如何哉今これを誦して誰か山陽の史眼に服せざるものあらん哉

◎時勢

文選時代の萬葉風の歌調も白氏文集の傳來を受けて一變し加ふに佛說に染みしより情緖の發する處巧は更に巧となり悄然と憐と情との三者は進歩して無常を思ふの念は動きて鹿の啼く音と聞くにも月の燈にも蟲の唧くにも水

の音にも紅葉零落し殘葉色付くにも情を悼め心を苦しめ涙を濺き四季折々の物に付け色々と憐みを起せり佛法は神道と共に國政の大綱となり嵯峨帝の時より神祇官にも諸經を用ゆることゝなり斯の如く帝王の歸依も多かりければ上の嗜む所下之に倣ふの譬へに洩れず官吏は皆尊崇したり最澄其門人圓仁、圓珍及び空海其門人眞濟、眞雅等輩出して斯の道を皷吹し各一派を開き其主旨とする處は文學を琢き性理を究め且つ人民を教導するにあり朝廷は其身元の卑賤なるにも拘らず重遇せしかば僧侶の威力最も强く醍醐帝以後は歴朝多く興福寺に歸依し朱雀帝は千僧供養し村上帝は万僧供養をなし王公の子弟僧侶となるもの多はく若し事あれば加持祈禱し重賞あり故に僧侶

益々尊く罪過あるもの山門に入れは法網を脱れ僧侶は王公大臣と比肩し大平護持の功に居て恩澤に誤るあり或は朝廷に不意あらば神輿を奉じて嗷訴するあり制抑すべからず然れとも其内部は妻帶肉食し田作商賣をなし言ふに忍びざるなり朝廷の守將は之れを防ぐ能はず觀花興月これ事とし一曲の吹彈染上の塵を動すも劒を拔くを知らず平安朝は是れ游惰の極端に達したり

朝廷は歌舞遊戯の場となり月卿雲客は治國濟民の道を講ずるなく詩歌管絃を事とし空詞空文行はれて吹笙の聲彈琴の響は九重の外に聞ゆ政廳は無事にして詩笙管絃を以て長日月を消磨せり優遊歡樂の具は備はりて諷ひ物には今樣催馬樂あり樂には青海波柳花苑あり曲水紅葉の宴賀

あり和琴瑟箏或は笛鞠香等の如きは時々の慰み物として
あり文藝には闘詩唱和あり和歌は最も盛に行はれ菊合組
合艶詞合にして男女圍繞し詩歌を以て情を通じ音曲を
以て相狎春日長しと雖も尚短しと嘆じ遂に古人夜燭
を把て遊ぶの事を追想し唐の玄宋の李白に於けるが
如く宮中の小酌は詞客をして艶詞を綴らしめ宮媛の
媚を買ひ公卿も亦宮女に狎れん事を競ひ文弱の極點
は淫靡に流れ藤原道長の滑少納言の艶事に於けるが
如し然れども平安朝時代は才媛の錚々たるもの多く
才媛とは和泉式部小式内侍伊勢大輔赤染衛門清少納
言紫式部等にして一條帝の皇后彰子に仕へたり而し
て宇多醍醐の朝には紀貫之紀友則凡河内躬恒壬生忠岑

等和歌の俊逸唐詩には三善清行菅原文時源融等にあり才
媛は是等の風潮に搖蕩せられしもの藤原氏は權を廟堂に
振ひ絃歌は能く鬼神を泣かしむる才ありと雖も悍臣を御
するの力なし故に忌避の心は增長し己れより頭角を現す
の輩あれば讒して除きされども是れ頓挫の始にして隨て
僞王の乱あり藤原氏驚惶爲す處なく漸く両三の武將の手
に收められて事寢するを得たり既して己れの女を納れて
權柄を挽回するに至りたり斯の如く遊惰の風の增進せし
は官制改革に因りしものにて學者は多しといふも官職分
擘せられてより用なく殿上人は無聊に苦み遣悶の慰の增
進せしによるべし
風俗の頽敗朝政の衰弊は前述の如し然れども書畫に僧宏

海橋逸勢藤原敏材菅原道實小野道風及び百濟河成巨勢金岡あり在原業平大友黒主小野小町等の詞客ありて美術文藝には後世に模本と殘し平安朝は一得一失ある者なり平安朝の政治に於けるも亦斯の如し然れども三善清行の强硬政畧を稱るあり藤原秀鄕平貞盛等の武將は東海の鎭撫を任し藤原忠文は南海征討の命を奉ずるあり道眞貫之の性行に於けるも前に述ぶるが如くして四海虞なく平安朝は是れ弱草强苗なきを論ずべからず

◎文藝

鐵甲梓弓を採るの武將は情緒を詩歌に訴へて其詞華麗に其文流婉なるあり衣冠笏を持するの公卿は心思を文詞に述べて其詩濃美其歌絢爛なる者あり滿朝は千紫万紅彩雲

花烟爛熳恰も水晶宮裡凝想練句奇芬紛々天上に薫り纖思巧慮異香珊々地下に滿ち冬にして冬にあらず秋にして秋にあらず夏にして夏にあらず夏秋冬は皆春色樂翁の源語に對して『櫻の如し』と謂ふも蓋し此の好況なり王朝は是れ文學の開拓者然れども其の特有物は驕恣浮華其の生産物は悖德亂倫なり悖德亂倫は好色華奢これに伴ひて公卿宮女の醜聞を洩し驕姿浮華は誇耀文弱に沈みて文臣武士の職掌を忘れ花晨月夕に狂奔亂舞し青山白水に吟歌朗詠し平安朝は是れ混亂極りなく筆笛歌舞は絶ゆる時なく醜語鄭聲耳にせざるはなし古今集の序に『目に見ぬ鬼神を泣かしめ男女の中を和らげ猛き武夫の心を慰む』と記せしをみれば貫之も屈原の所謂世を擧げて皆濁れるに

比する者歟四面驕奢浮華好色華奢を以て鎖され敢て一遍の善言良行を知らず醜語鄭聲の裡にありしもの誰れか習俗に感染せられんや貫之世擧げて皆瀾るの通弊を避けて新空氣に呼吸し靜心隔世別天地にあり文は是れ金聲玉振詞は是れ婉麗優美其纖巧精美なるは貫之の貫之たる所以にして余は遺文に於てこれを知る柔弱の文を誦すれば其柔弱の性質と化し慷慨の詞を讀まば奮發の氣象を現すは古今の通則余の王朝時代の文字を誦す柔弱なりと謂は適當なり然れども平眼凡胸敢て妄評にあらざるを信ず

貫之の歌古今集後撰集及び家集に於てこれを知るを得べく漢文は古今集の序大井川行幸の序の二篇のみ其作たる醜語鄭聲の草叢裡を脱却し來て非凡超絶し情緒の發する

處愛戀は愛戀以外にわかつて唱るべく一咏無邪なるべく錦腸万斛は彫管一枝によりて現はれ燦爛眩曄光彩陸離神州の詩經として誦すべし天上の清絶靈絶至神至妙消息を洩し來て万物を陶冶し陰陽を鋪敍し山河を磅礴し雲煙を醞釀するの手腕は神州の文選として恥る處なかるべし古今集は勅選歌集の始めにして和歌の模範を示したるものなり是れに次ぎて村上朝に後撰あり花山の朝に拾遺あり三勅選歌集を合して三代集と稱しこれに陪き勅選として後拾遺(白河)金葉(崇德)詞華(近衛)千載(後鳥羽)新古今(土御門帝)の五集ありこれに三代集を併せて八代集と稱し其歌は巧拙免れずと雖も後進の子弟の軌範とする處なり

謝疊山官を棄て東山に隱れ歷代の文章を蒐集して文章軌

範を編し情懷を寓す韓昌黎の與于襄陽書は自ら求朗に象り送李愿歸盤谷序は李愿か棄官高蹈に較べ陶靖節が歸去來辭は隱逸の情に己れを擬す故に卷帙數字を以て計へず王字集侯字集を稱し王侯將相豈有種の七字を用ひて冊子となす其配慮察すべし茅鹿門八代の遺を繼がんと欲し秦漢及び六朝の文學彬々たる時代に示すに唐宋八家を以て唐宋八家文を輯す韓昌黎の撰茂なるは秦に配し柳子厚の謹嚴なるは漢に遇し歐陽永叔の粗豪は吳に比し蘇明允の眞率は東晉に對せしめ蘇子瞻の精確は宋に參し蘇子由の精銳は齊に照らし曾子固の彩爛なるは梁に差なかるべく王介甫の蒼涼は陳に遇なし

文を作る其文を讀みて以て自ら適せりと言ふべからず歌

を咏ず其歌を見て自ら樂みするものにあらず詩に於けるも斯の如し詩文歌は歷史なり讀みて政治の得失を察すべく咏して風俗の變遷を鑑みるべく吟して人品如何を判ずるを得べし亂世の作を味へば慷慨に昇平の章を誦すれば流麗なるべし故に詩文は詞なり歌も亦然り歌は己れの心情を訴へるものなれば詩文に伴はれて相下だらず疊山文章軌範を編む慷慨の餘憤なり鹿門唐宋八家文を輯す亦慷慨の餘熠なり而して鹿門の慷慨は疊山と異なれり疊山は意を政治に得ずして憤り鹿門は文學の振はざるに慨く古今集以下集を採りて八代集と號するも亦た鹿門の輯なり醍醐以下土御門の朝に至るまでの文學を精拔してれを秦漢六朝に唱へて古今を秦に蓋かし後撰を漢に因らしめ拾

遺は吳と別ち後拾遺を東晉に兼ね金葉を宋に備へ詞華を齊に考へ千載は梁に似せ新古今は陳の如し後ちに十三の勅撰歌集を合せて廿一代集と號するも八代集の如く意志のあるにあらず

貫之の土佐守となり任國に下らんとするや勅旨を奉じて政餘歌集を撰ぶ貫之い歌林の泰斗なれば其間平安の文學は輸入して土佐にあるべし滿期歸朝携へて到京すれば醍醐帝既に崩して用ひられず私撰として世に知らるこれを新撰集といふ古今集と全一視して價あり

貫之の榮譽亦高し歌を集めて斯文の模範となり文を記して婦女の用となる土佐日記は婦女の用文なるのみならず紀程の典範なるべし岸本大隅が謂ひし「日紀の文徒らに見

過せばさまでもあらねど味へば心も筆も及ばぬ計りの味も出で來る」との一語は全編の評語として見るを得べく筆力自在にして幽遠高妙なり其全篇の組織を云へば灘々たる綠水皎々たる白砂を交へ離情を舒して愛情を表し祭祀を序して國俗を表し風濤を聞けば海賊の警かを用意し松籟を見ては天候の美に感し人情を說き產物を著はして靈筆縱橫少女を悼み送迎に勇さみ四情は全篇中に收まり變化を好むの人をして飽かざらしむ文章の婉麗優美には喜ぶべし宇多醍醐の朝は平安朝文學の最上點に達し村上に至て大中臣能宣等の名手ありといふも貫之等の右に出づる能はず下りて一條帝の時に至りて紫式部等の徒漸く名を得たるのみ

◎經歷

京都は四時の清觀として嵐山の花鴨川の螢嵯峨野の月春羽山の雪あり仰ぎ視れば多涙多恨なるあり俯して顧みれば清楚淡泊なるあり之れを文詞に徴れば濃美にして絢爛華麗にして流麗愛情は其間に搖動せられて恰も天然の雅美に富みたり比叡愛宕の諸山は巍然として高く鴨川は深々として長く秀麗の氣鍾る處即ち京都なり。

貫之は望之の子其年齒を詳かにせずと雖も延喜の朝に於て越前權小椽として始て官に任せられたり其父望之祖父本道高祖父興道等顯れず高祖々父梶長は中納言にて大同の年薨じたり故に貫之の經歷に就きては父祖の經歷より推考しがたけれども驕奢浮華の世に處しながら悖德亂倫

よ沈まず豫想外に出で文學の開拓者となり政治の先覺者となり鞠躬時勢に搖せられ不撓不屈の間に雄飛せし才氣英發非凡超絶なるは蓋し家庭の功にあらざるべし貫之の世に顯はれしは文學としては延喜五年古今集を上りしを始とし政治家としては延長八年の土佐守にありし越前權小椽は古今集を上りし後一年之と雖も貫之が如何なる緣故に依りて勅命を得しは確かに考へ難けれども才氣の九重に洩れしならん貫之も亦寧馨兒として生れながら天地を震慴するの才氣を有したるものと知る而して貫之の門葉固より賤しきにもあらず家庭固より低きにもあらず家庭より察すれば斯の寧馨兒の生れ來る豫想外あるべし山の靈河の偉共に是れ偉人を生むといへば貫之は秀麗の風

る處に於て天然に生を受たりといふべく然れば貫之の父祖は貫之の才氣に依て顯るを得たりといふも敢て憚る處なし

南北両朝の正潤は歳久くして決せず大日本史出で始めて判定を得たり楠木正成兒島高德等は儒人なり英傑にあらざるなり混沌たる世に生れ名利に迷ふの時に際し而も長歳月を消盡して考究するも正邪久しく決するの日に於て決然邪を退けて正に就きしは聖人君子の徒たり其笠置山上奏慰の詞船坂阪上の詩は尋常の儒人にあらざるも紛紜麻亂の世に生を受けて干戈を把りしより忠臣として不朽に名を得たり若し昇平無事の貫之時代にあらしめば土着の腐儒曲儒なり貫之は文弱時代に時勢に抽で縛々として

一機軸を出し文藝に政治に當時に絶出す貫之の爲す所亦慷慨の氣あり若し貫之をして南北両朝の世に生を受けしめば貫之は蓋し英傑なるべし人臣も亦世の清濁に於て遇不遇ある歟

◎餘響

其遺蹟を見其偉行により其遺蹟偉行に伴ふの事物を活動し來る是れ自然の然らしむる處なり天明年中土佐國比江の村國廳の舊蹟に碑を建て紀子の遺德を表し毎に高村氏の宅に和歌の會あり下婢あり興を助く尾池春水稻垣長諷等下婢をして戯に字句を敲へて强て歌を詠せしむ婢は韮生郷岩改村明り戸の者歌の何たるを解せざるなり即ち案じて曰く「明り戸にこそたゞねれ我宿は月さへもらぬ山陰

にして」と咏じたりしは遺跡に觸れて活動し來れるもの幡多郡伊田村松山寺に燒桐僅かゑ月の字を留む貫之の遺墨として愛惜ある金玉よりも貴し是れ亦偉行の活動のみ、

和歌は國文なり國文の基は皇道神道なり藤原氏の權は文弱と共に衰へて平家に移り平家は武骨健腕を衣冠に粧ひ歳月を保つ能はずして粉面涅齒西海に斃れ保平の亂に遷りて源氏の覇業となり幾多の變遷を經て德川家に屬したり其間の天子は空位を京都に擁したり而して其罪の歸する如は平安朝の誇耀文弱なりこれを挽回して維新の新局面を開きたるも他にありと雖も皇道神道者の鼓吹したる功も亦大なりとす神道を發起したるものは國文なり然れば平安朝の文學再起を得て挽回したりと謂はざるを得ず

と雖も亦當時の文學者の偉行遺蹟の活動に依るべし土佐の國は薩長肥と共に王室に盡したるもの其子弟は南學の儒流にありといふも又國學の發達の助けたる故なり然らば貫之が遺蹟偉行も亦關係なしといふべからず

比江村に趣く

京より歸りし後は貫之主の遺趾をも尋ねたき心なれども何時とても障りありければ今一日と延びたれ然るに或る友より誘はれ九月廿日の日曜を幸に趣きぬ友も同好なれば話も面白く朝八時頃蝸廬を出で半時計して田邊島の堤を過ぎりしに死人草は今を盛りと咲き亂れて紅に朝露は珊々として落ち見るも憐れなりこれより中島村へと赴き國分川に出て放生會磧に至ればはや國分

の古都に着したる心にて王朝の昔國主が此所にて放生會を行ひしかと思へば何となくなつかしく國分寺の門前なる一茗亭につき白醪を沽ひ聊か旅程の勞を慰せり門前なる仁王は嚴然として立たるも晩稻は苅入れて其傍に積み揚げられ自ら尊嚴の威を失へり門内の礎は聖武帝創立の規模を思ふべく總社に謁ては貫之主敬神の厚きを想ふに足るべし寺僧に遇ふて沿革を尋ねたけれども國分の遺趾に急かれ二三町行けば國廳の遺趾蔬菜地を抽て寸に滿たず蕎麥咲乱れて縝紛白雪の如く而して尾池春水等の建立せられし紀氏舊蹟碑は寒草の内に孤立し國分川は潺々として其邊を過り岡豐山峨々として西南に聳ゑ秋風蕭颯衣尚は冷きを覺ゆ程子が孟軻を

評して秋殺と曰ひ或は秋獄青々と曰ひしも斯の樣の景なる歟遺蹟所々に點在して尋ぬれば多けれども今一々尋ね得ず去て永源寺を訪ひ山内彦作の墓を見る墓碑高く聳ゑ昔しの威嚴を想ふべくも今は寒蛩の巣窟と化し墓門掃はざるに似たり「彦作さん雨の降るのに今日もれ鷹狩り」と謠はれ日々に遊獵を事とし百姓を泣かしめ野中傳右衛門の失政を彈劾せし時の如きは其勢ひ甚だ盛なりしに時勢一變野中は罠臣となり墓碑香火絶ゑざるに彦作の墓は空しく墓煙荒涼の内に埋沒して人の絶て訪ふもの無きに至れり出て日吉社に至る社は小なりと雖も貫之の勸請を以て顯はる時に日は西峯に春き寒蛩唧々亦歸るを促すが如し急に歸程に上れば泥濘青鞋を

嚙みて行くべからず由て路傍の秋草を踏むに衰蟋蟀脚下に乱飛し紛として聲あり大津に出で舟を呼びたる頃は日全く沒し暮色蒼々舟中村里の燈火を望みつゝ巴塘に着すれば絃歌湧きて不夜城の如し物換り星移り幾秋を度れば樓中の嬌顔其れ何くにか在る檻外の長江空しく流れて征人の感を惹く如何ぞや

右一篇廿九年の秋の稿本本篇に因あれば附記して鴻川の痕を留む

紀貫之 終

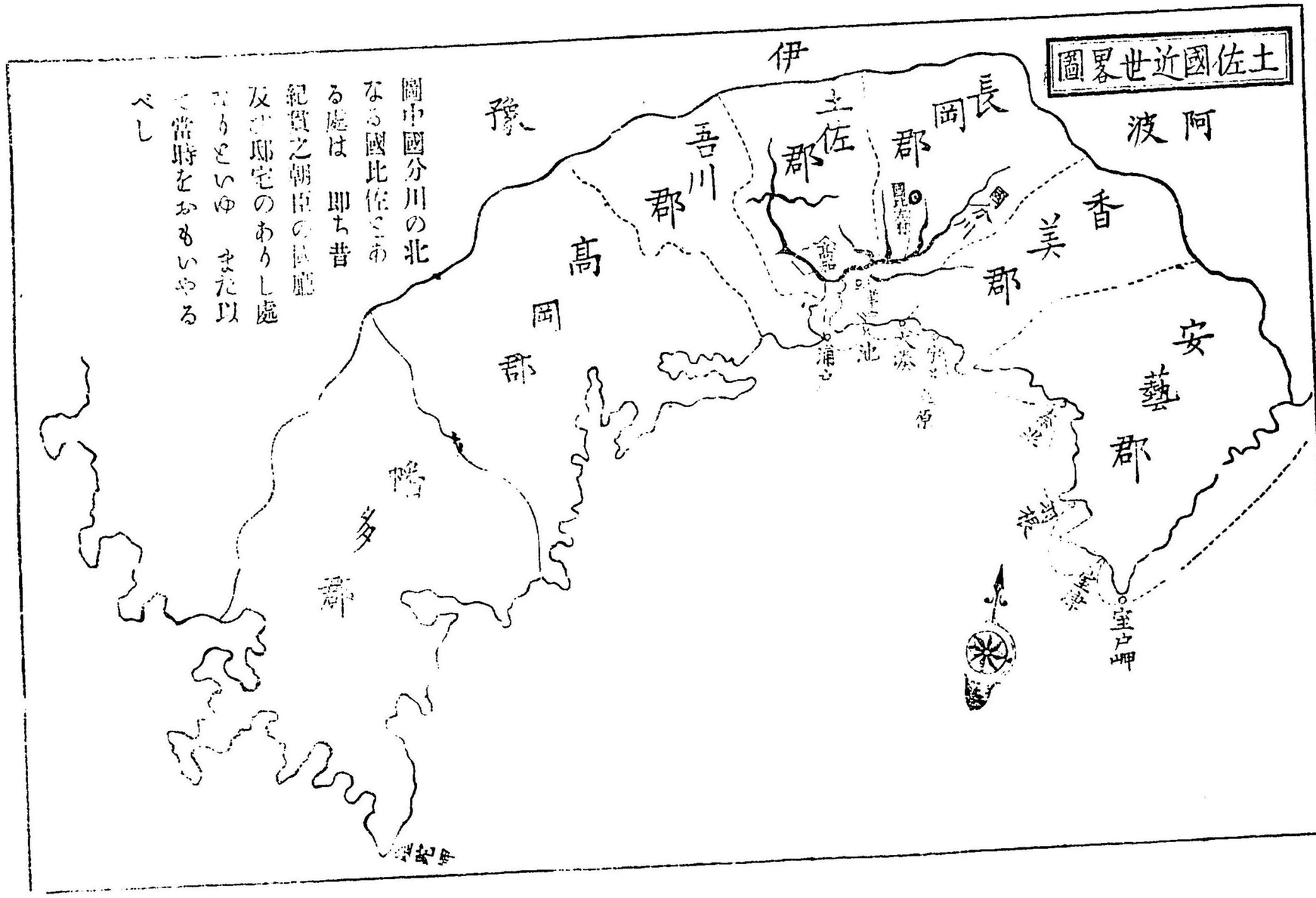
土佐日記

紀貫之 終

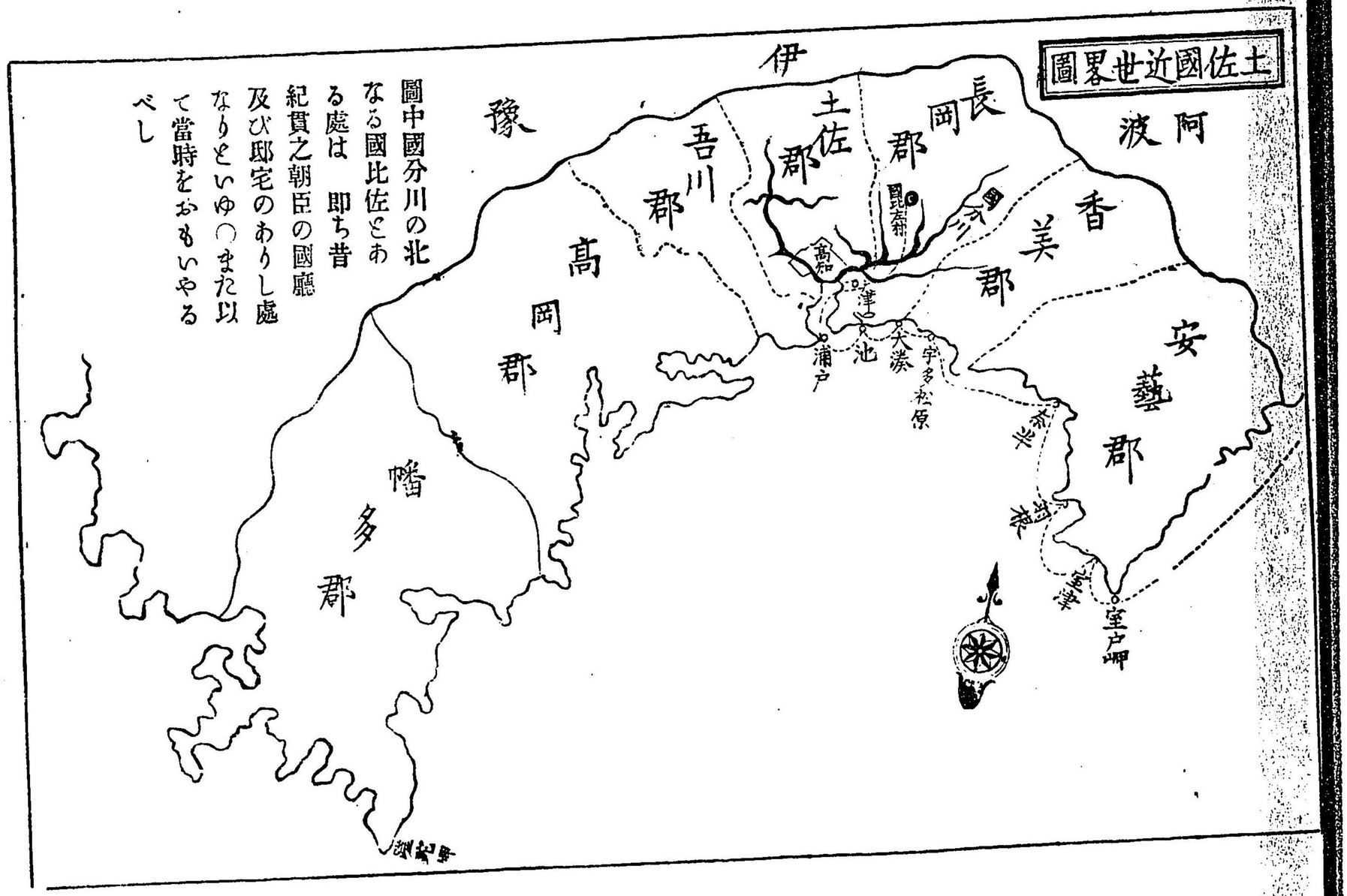
嚙みて行くべからず由て路傍の秋草を踏むに衰蟝脚下に乱飛し紛として聲あり大津に出で舟を呼びたる頃は日全く沒し暮色蒼々舟中村里の燈火を望みつゝ巴塘に着すれば絃歌湧きて不夜城の如し物換り星移り幾秋を度れば樓中の嬌顔其れ何くにか在る檻外の長江空しく流れて征人の感を惹く如何ぞや

右一篇廿九年の秋の稿本本篇に因あれば附記して鴻川の痕を留む

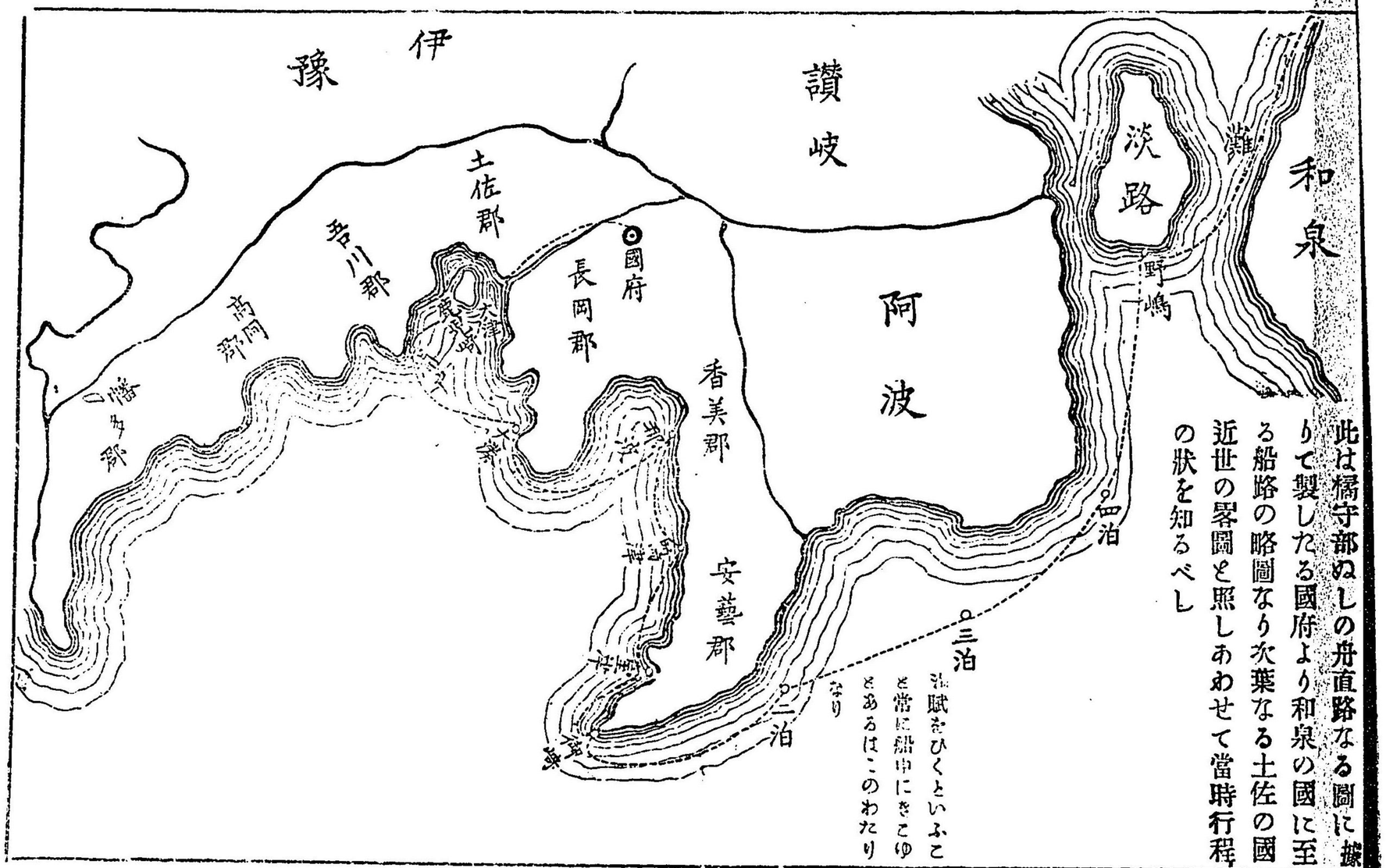
土佐日記



圖中國分川の北なる國比佐とある處は　即ち昔紀貫之朝臣の居館及び邸宅のありし處なりといゆ　また以て當時をおもいやるべし



圖中國分川の北なる國比佐とある處は　即ち昔紀貫之朝臣の國廳及び邸宅のありし處なりといゆ〇また以て當時をおもいやるべし



此は橘守部ぬしの舟直路なる圖に據りて製したる國府より和泉の國に至る船路の略圖なり次葉なる土佐の國近世の畧圖と照しあわせて當時行程の狀を知るべし

土佐日記

男も(す)といふ日記といふものを、女もして見むとてするなり。それの年の十二月の廿日あまり一日の、いぬの時に門出(す)。そのよしいさゝか物に書きつ(く)。

ある人あがたの四年五年はてゝ、れいの事ども皆しをへて解由などとりて、住む館よりいでゝ、舟に乘るべき所へわたる、かれこれしるしらずおくり(す)。年頃よくぐしつる人々なん、別れがたく思ひて、其日しきりに、とかくしつゝのゝしるうちに、夜ふけぬ。

廿二日、和泉の國まで、たひらかにとねがひたつ。藤原言實、舟路なれど馬のはなむけす。かみなかしも酔ひすぎて、いとあ

やしく、しほ海のほとりにて、あざれあへり。

廿三日、八木の康敎といふ人あり。この人、國にかならずしもいひつかふ者にもあらず、これぞたゞしきやうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらん國人の心の常として、今はと見ねざるを、心あるものはぢずきなんきける。これはものによりて、ほむるにしもあらず。

廿四日、講師、馬のはなむけしに出でませり。ありとある上下童まで、酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字にふみてぞあそぶ。

廿五日、守のたちより、よびにふみもて來れり。よばれて至りて、日ひと日、夜ひと夜、とかくやそぶやうにて明にけり

廿六日、猶守の館にて、あるじゝのゝしりて、をのこあまたたに

ものかづけたり、からうた聲あげていひけり。やまと歌、あるじもまらうどもこと人もいひあへりけり。からうたこれにはかゝず。やまと歌、あるじの守のよめりける、

都いでゝ君に逢むとこし物をこしかひもなく別れぬるかな

となんありければ、かへる前の守のよめる、

白妙の浪路を遠くゆきかひてわれに似べきは誰ならなくに

こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。とかくいひて前の守も今のも、もろともにおりて、今のあるじも、前のも、手とりかはして、酔ごとに、心よげなることとして、出でにけり。

廿七日、大津より、浦戸をさしてこぎいづ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして俄に失せしかば、此頃のいでたちいそぎを見れど、何事もねいはず、京へかへるに、女子のなきのみぞ、哀しみ戀ふる。ある人々どもねたへず。このあひだに、ある人の書きていだせる歌、

都へと思ふものゝ悲しきはかへらぬ人のあればなりけり

またあるときには

あるものと忘れつゝ猶なき人をいづらと問ぞ悲しかりける

といひけるあひだに、鹿兒の崎といふ所に、守のはらから、又こと人、これから酒などもて追ひ來て、磯におりゐて、別れがたきことをいふ。守の館の人々の中に、この來る人々ぞ、心あるやうにはいはれはのめく。かく別れがたくいひて、かの人々の、口網ももるもちにて、この海べにて、はなひ出せるうたをしと思ふ人や留ると葦鴨の打むれてこそわれは來にけれ

といひてありければ、いとゞいたくゆでゝ、行人のよめりける

棹させどそこひ知られぬわたつみの深き心を君に見るかな

といふあひだに、梶取ものゝあはれもしらで、おのれし酒をくらひつれば、早くいなんとて、潮みちぬ、風もふきぬべしとさわげば、舟に乘りなんとす。このをりに、ある人々、折節につけて、から歌ども、時に似つかはしきをいふ。又ある人、西國な

れど、甲斐歌などいふ。かくうたふにふなやかたの座もちり空ゆく雲もたゞよひぬとぞいふなる。こよひ浦戸にとまる藤原の言實、橘の季衡、こと人々おひ來たり。

廿八日、浦戸よりこぎ出て、大湊をおふ。このあひだに、はやくゆ守の子、山口の千岑、酒よきものどももてきて、舟にいれたり。ゆく〳〵飲みくふ。

廿九日、大湊にとまれり。醫師ふりはへて、屠蘇白散酒くはへてもてきたり。心ざしあるに似たり。

元日、なほ同じ泊なり。白散を、ある者夜の間とて、舟やかたにさしはさめりければ、風にふきながさせて、海に入れて、をの飲まずなりぬ、芋もあらめも齒がためもなし。かうやうの物なき國なり。求めもおかず。たゞ押鮎の口をのみぞすふ。この吸ふ人々の口を押鮎もし思ふやうあらんや。今日は京にのみぞ思ひやらるゝ。九重のかどのしりくめ繩の、なよしの頭ひゝら木ら、いかにとぞいひあへる。

二日、なほ大湊に泊れり。講師、もの酒おこせたり、

三日、同じ所なり。もし風波の、しばしと惜む心やあらん。こゝろもとなし。

四日、風ふけばをに出でたゝず。まさつら、酒よき物たいまつれり。このかうやうの物もてくる人々、なほしもをあらで、いさゝけわざせさす物もなし。賑はゝしきやうなれど、まくる心地す。

五日、風浪やまねば、なほ同じところにあり。人々たをずとぶらひに(く)

六日、きのふの如し。

七日にあらぬ。おなじ湊にあり。今日はあを馬を思へど、かひなし。ただ波の白きゞ見もる。かゝるあひだに人の家の、いけと名ある所あり。鯉はなくて。鮒よりはじめて、川のも、海のもことものも、長櫃にになひつゝけておこせたり。若菜籠にいれて、雉など花につけたり。若菜ぞ今日を知らせたる歌ありその歌、

澤茅生の野べにしあれば水もなき池に摘つる若菜なりけり

いとおかしかし。このいけといふは、所の名なり。よき人の、男につきて下りて住みけるなり。この長櫃の物は、みな人童までにくれたれば、飽きみちて、舟子どもはらつゝみをうち

て。海をさへ愕かして。波たてつべし。かくてこのあひだに、事多かり。今わりごもたせて來たる人、その名などぞや。いま思ひいでむ。この人、歌よまんと思ふ心ありてなりけり。とかくいひ〳〵ぞ、浪の立つなる事と、うれへいひてよめる歌、

ゆくさきに立つ白浪の聲よりも後れてなかん我やまさらむ

とぞよめる。いと大ごゑなるべし。もてくる物よりは、歌はいかゝあらん。此の歌を、これかれあはれがれども、ひとりもかへしせず。しつべき人もまじはれゝど、これをのみいたがり物をのみ喰ひて、夜ふけぬ。この歌ぬし、またまからずといひてたちぬ。ある人の子の童なる、ひそかにいふ、まろ此歌のかへしせんといふ。驚きていとおかしき事かな、よみてんやは

よみつべくは、はやいへかしといふ。まからずとて立ぬる人を、まちてよまんとてもとめけるを、夜ふけぬとにやありけむ、やがていにけり。そもく、いかゞよみたりと、いぶかしがりてとふ。この童、さすがに耻ぢていはず。しひてとへばいへる歌、

ゆく人もとまるも袖の涙川みぎはのみこそぬれまさりけれ

となんよめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。わらはごとにては、何かはせん、おんなおきなにをしつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらんとて、おかれぬめり。

八日、さはる事ありて、猶おなじ所なり。こよひの月は海にぞ

入る。これを見て、業平の君の、山のはにげていれずもあらなんといふ歌なんおぼゆる。もし海邊にてよまゝしかば、波立さへていれずもあらなんとよみてましや。今この歌を思ひいでゝ、ある人のよめりける、

てる月の流るゝ見れば天の川いづるみなとは海にざりける、

九日、つとめて大湊より。那波の泊をおはんとて、こぎ出けり。これかれたがひに、國のさかひのうちはとて、見送りに來る人あまたが中に、藤原言實、橘季衡、長谷部行政らなん。御館よりいでたまひし日より、こゝかしこに追ひ來る。この人々ぞ心ざしある人なりける。この人々の深き心ざしは、この海にはおとらざるべし、これより今は漕ぎ離れてゆく。これを見

送らんとてゞ、この人どもは追ひきける。これより今はこぎゆくまにまに、海のはとりに留まる人も遠くなりぬ。舟の人も見わずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。舟にも思ふ事あれどかひなし。

かゝれどこの歌を、ひとりごとにしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れども ふみしなければ知ずやある らん

かくて、宇多の松原を行過ぐ。其松の數いくそばく、いく千年經たりとしらず。もとごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴飛びかふ。おもしろしと見るにたへずして、舟人のよめる歌、

見渡せば松のうれ毎に住鶴は千とせぞちとぞ思ふべら なる

とや。この歌は、所を見るにねまさらず。かくあるを見つゝ漕ぎ行くまに〳〵、山も海もみな暮れ夜ふけて西東も見わずして、てけの事、梶取の心にまかせつ。をのこもならいぬは、いとも心細し、まして女は、船底にかしらをつきあてゝ、ねをのみぞなく。かく思へば、舟子かぢとりは、ふなうたうたひて、何ともおもへらず。そのうたふ歌、

春の野にてぞねをばなく、わかすゝきにて手をきる〳〵

つんだる菜を、親やまぼるらん、しうとめやくふらん、かへらや。よんべのうなゐもがな、錢ではん、よんべの菜を、うらごとをしておぎのりわざをして、錢ももてこず、おのれだに來ず。

これなみに多かれどかゝず。これらを人の笑ふをきゝて、海

はあるれど、心はすこしあぎぬ。かくもきくらして、とまりにいたりて、れきな人ひとりたうめあるがなかに、心地あしゝして、物ものし給はでひそまりぬ。

十日、那波の泊にとまりぬ。

十一日、あかつきに舟を出して、室津をおふ。人皆まだ寐たれば、海のありさまも見ねず。たゞ月を見てぞ、西ひむがしをばしりける。かゝるあひだに、みな夜あけて、手あらひれいの事どもして、ひるになりぬ。今し羽根といふ所にきぬ。若き童、この所の名をきゝて、はねといふ所は、鳥の羽のやうにやあるといふ、また幼き童のことなれば、人々わらふに、ありける女童なん、この歌をよめる、

まことにて名にきく所はねあらば飛ぶが如くに都へも

がな

とぞいへる。男も女も、いかでとく都へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、げにと思ひて、人々わすれずこのはねといふ所とふ童のついでにぞ、まだむかしの人を思ひいでゝ、いづれの時にか忘るゝ。今日はまして、母のかなしむ事は、くだりし時の人の數たらねば、古き歌に、かずはたらでぞかへるべらなるといふ事を思ひいでゝ、人のよめる

世の中に思ひあれども子を戀ふる思ひにまさる思ひなき哉

といひつゝなん。

十二日、雨ふらず。文時、維茂が舟のおくれたりし、鳴し津より室津につきぬ。

十三日、曉にいさゝか雨ふる。しばしありてやみぬ。男女これかれゆゝみなどせんとて、あたりのよろしき所におりてゆく。海を見やれば、

雲も皆浪とぞ見ゆる蛋もがないづれか海と問ひて知るべく。

となん歌よめる。さて十日あまりなれば、月おもしろし。船にのりそめし日より、船には、紅濃く、よき衣きず。それは海の神におぢてといひて、何のあしかげにことづけて、ほけのつまの、いずしずしあはびをぞ、心にもあらぬ脛にあげて見せける。

十四日、あかつきより雨ふれば、おなじ所に泊れり。舟君せち後す。さうじ物なければ、午の時より後に、梶取のきのふつりたりし鯛に、錢なければ、米をとりかけて、おちられぬ。かゝるぎおはくありぬ。かぢとり又鯛もて來たり。米酒しばゝくく(る)。梶取けしきあしからず。

十五日、けふあづきがも煮ず。くちをしく、猶日のあしければゐざるほどにぞ、けふ廿日あまり經ぬる。いたづらに日を送れば、人々海をながめつゝぞある。女の童のいへる、

立てばたつゐれば又ゐる吹風と浪とは思ふどちにや有らん

いふかひなきものゝいへるには、いとにつかはし。

十六日、風浪やまねば、猶おなじ所にとまり、たゞ海に波なくして、いつしかみさきといふ所、わたらんとのみなん思ふ、風波ともにやむべくもあらず。ある人の、この浪立つを見てよ

めるうた、

霜だにもおかぬかたぞといふなれど波の中には雪ぞ降ける

さて舟に乗りし日より今日までに、廿日あまり五日になりにけり。

十七日、くもれる雲なくなりて、あかつき月夜いとおもしろければ、舟をいだしてすぎゆく。このあひだに、雲の上も海の底も、おなじごとくになんありける。うべも昔のおのこは。棹い穿つ波のうへの月、船はおそふうみの中のそらをとはいひけん。さいさしに聞けるなり、またある人のよめる、

みなそこの月のうへよりこぐ舟の棹にさはるは桂なるちん

これをきいて、ある人のまたよめる、

かげ見れば波のそこなる久方の空こさわたる雁ぞわびしき

かくいふあひだに、夜やうやく明け行くに、楫取ら、黒き雲にはかにいでぬ、風もふきぬべし、御船かへしてんといひてかへる。このあひだに雨ふりぬ。いとわびし。

十八日、猶おなじ所にあり。海あらければ舟いださず。この泊遠く見れども近く見れども、いとおもしろし。かゝれども、くるしければ、何事もおぼえず。男どちは、心やりにやあらん、からうたなどいふべし。舟もいださで、いたづらなれば、ある人のよめる、

磯鰯のよするいそには年月をいつともわかぬ雪のみぞ

降る

この歌は、常せぬ人のことなり。また人のよめる

風による波の磯にはうぐひすも春もを知らぬ花のみぞ

さく

この歌どもを、すこしよろしと聞きて、舟のをさしけるれき

あ、月頃の苦しき心やりによめる、

立つ浪を雪か花かとふく風によせつゝ人をはかるべら

なぞ

この歌どもを、人のなにかといふを、ある人のきゝふけりて

よめる、その歌、よめる文字、三十もじあまり七もじ、人皆をあ

らで笑ふやうなり。歌ぬし、いとけしきあしくて名はず。まね

べどもをまねばず。書けりともを讀みあへ難かるべし。今日

だにいひがたし。まして後にはいかならん。

十九日、日あしければ舟いださず。皆人々うれへなげく。

二十日、昨日のやうなれば、舟いださず。たゞ日の經ぬる數を、今日いく

苦しくこゝろもとおければ、たゞ日の經ぬる數を、今日いく

か、廿日廿日と數ふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわ

びし。夜はいもねず。廿日の夜の月出にけり。山の端もなくて

海の中よりぞいでくる。かうやうあるを見てや、むかし安部

の仲麿といひける人は、もろこしに渡りて、歸りきたる時に

舟に乘るべき所にて、かの國人、馬のはなむけし、別をしみて

かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけん。廿日

の夜の月出るまでぞありける。その月は、海よりぞいでける

これを見て仲麿のぬし、わが國には、かゝる歌なん、神代より

神もよみたび、今は上中下の人も、かうやうに別をしみ、よろこびもあり、かなしびもある時にはよむとて、よめりける歌、

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでしつき
かも

とぞよめりける。かの國の人、聞知るまじくおぼえたれども、ことの心を、をとこ文字に、さまを書きいだして、こゝの詞傳へたる人にいひ知らせければ、心をや聞得たりけん。いと思ひの外になんめでける。もろこしと、この國とい、こと、こと、なるものなれど、月の影ハ同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらん。さて今そのかみを思ひやりて、ある人のよめる歌、

都にて山の端に見し月なれどなみよりいでゝ波にこそ

いれ

廿一日、卵の時ばかりに舟出(す)。みな人々の舟いで(ぬ)。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞあり。おぼろげの願ひによりてにやあらん。風もふかず、よき日いできてこぎゆく。このあひだに。つかはれんとて、つきてくる童あり。それがうたふ歌、

猶こそ國の方は見やらるれ吾父母ありとし思へばかへらや

とうたふあはれある、かく謠ふを聞きつゝ漕ぎくるに、くろ鳥といふ鳥いはほの上に集りをり。その巖のもとに、浪白くうちよす。梶取のいふやう、黒き鳥のもとに、白き浪よすぞいふ。てのことば、何とにはなけれど、ものいふやうにぞ聞

ゐたる。人の程にあはねば答むるなり。かくいひつゝゆくに舟君なる人、浪を見て、國よりいでしめて、海賊むくいせんといふなる事を思ふ上に、海のまおたそろしければ、頭も皆しらけぬ。七十八十は、海にあるものなり。

わが髪の雪といそべのしら浪といづれまされりおきつ島守

かぢとりいへ。

廿二日、よべのとまりより、こと泊をおひてぞゆく。はるかに山見ゆ。年九つばかりなる男の童、年よりいをさなくぞあるこの童、舟をこぐまに〳〵、山も行くと見ゆるを見て、あやしき事と、歌をぞよめる。そのうた、

漕ぎてゆく舟にし見れば足引の山さへゆくを松いしら

ずや

とぞいへるをさなき童の事にては似つかはし。げふ海あらけ、磯にゆきふり、浪の花さけり。ある人のよめる、

波とのみひとへに聞けど色見れば雪と花とにまがひぬる哉

廿三日、日照りて曇りぬ。このわたり、海賊おそりありといへば、神佛を祈る。

廿四日、昨日のおなじ所なり。

廿五日、楫とりらの、きた風あしといへば、舟いださず。海賊追ひ(く)といふ事、たゑずきこ(ゆ)。

廿六日、まことにやあらん、海賊追ふといへば、夜なかばかりより、舟を出してこぎ來る道に、たむけする所あり。楫取して、

幣たてまつらするに、ぬさのひんがしへ散れば、かぢとりの申したいまつる事は、この幣のちる方に、御舟すみやかに、漕がしめたまへと申してたいまつる。これをきゝて、ある童のよめる、

わだつみのちぶりの神に手向する幣の追風やまずふかなん

とぞよめる。このあひだに、風のよければ、かぢとりいたくはこりて、舟に帆かけなどよろこぶ。その音をきゝて、童も女もいつしかと思へばにやあらん。いたくよろこぶ。その中に、淡路のたうめといふ人のよめる歌、

追風のふきぬる時はゆく舟のはでうちてこそ嬉しかり

とぞ、ていけの事につけつゝ祈る。

廿七日、風ふき浪あらければ、舟いださず。これかれかしこくなげく。男たちの心なぐさめに、からうたに、日をのぞめば都とはしなどいふある事のさまをきゝて、ある女のよめる歌、

日をだにも天雲近く見るものを都へとれもふ道のはるけさ

又ある人のよめる、

吹風のたゆぬかぎりし立くれば波路はいとゞ遠けかりけり

日ひと日風やまず。つまはじきをしてねぬ。

廿八日、よもすがら雨やまずけさも、

廿九日、舟出してゆくに、日うら〳〵と照りてこぎゆく。爪い

と長くなりにたるを見て、日を數ふれば、今日は子日なりけ
ればきらず。む月なれば、京の子の日の事いひいでゝ、小松も
がなといへど、海なかなればかたしかし。ある女のかきて出
せる歌、

おほつかな今日は子の日か蜑ならば海松を笼に引まし
物を

とぞいへる。海にて子の日の歌にては。いかゝあらん。ある人
のよめる歌。

今日なれど若菜も摘まず春日野のわが漕渡る浦になけ
れば

かくいひつゝ漕ぎゆく。れもしろき所に舟をよせてこゝや
いづこといひければ、土佐の泊とぞいひける。昔土佐といひ

ける所に住みける女、この舟にまじりけり。それがいひけら
く、昔しばしありし所の、名のたぐひにぞあなる。あはれとい
ひてよめる歌、

年ごろを住みし所の名にしれへばきよる浪をも哀とぞ
見る

卅日、雨風ふかず。海賊は夜ありきせざなりと聞きて、夜なか
ばかりに舟をいだして、阿波のみとをわたる夜なかなれば
西東も見ねず。をとこ女、からく神佛を祈りて、このみとを渡
りぬ。演卯の時ばかりに、奴島といふ所を過ぎて、田無川とい
ふ所をわたる。からくいそぎて、和泉の灘といふ處にいたり
ぬ。けふ海に浪に似たるものなし。神佛の惠かうぶれるに似
たり。今日、舟に乘りし日より數ふれば、三十日あまり九日に

なりにけり。今は和泉の國に來ぬれば、海賊ものならず。

二月朔日、朝の間雨ふり、午の時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ處より出てこぎゆく。海の上昨日のごとくに、風浪見えず。黑崎の松原を經て行く。所の名は黑く、松の色ゝ青く磯の浪は雪の如くに白く、貝の色は蘇芳にて、五色に、今一色ぞたらぬ。このあひだに、今日ゝはこの浦といふ處より、網手曳きてゆく。かくゆくあひだに、ある人のよめる歌、

玉くしげ　こゝの浦浪たゝぬ日はうみを鏡とたれか見ざらん

またふな君のいはく、この月まで なりぬることゝて、なげきて、苦しきにたへずして、人もいふこととて、心やりにいへる歌、

行舟の網手の長き春の日を四十日五十日まで我ゝ經にけり

きく人の思へるやう、なるたゞごとなるとぞ、ひそかにいふべし。ふな君の、からくひねり出して、ふと思へる事を、おしもてそしひへとて、さゝめきてやみぬ。にはかに風浪たかければ、といまりぬ。

二日、浪風やまず。日ひと日、夜もすがら、神佛を祈る。

三日、海の上昨日のやうなれば、舟いださず。風の吹くことやまねば、岸の浪たちかへる。これにつけてよめる歌、

緒をよりてかひなき物は落積もる涙の玉をぬかぬなりけり

かくて今日は暮れぬ。

四日、かぢとり、けふ風雲のけしき、はなはだあしといひて、舟出さずおりぬ。しかれども、ひねもすに波風たゝず。その楫取は、日もねはからぬかたゐなりけり、この泊の濱には、くさぐさのうるはしき貝、石など多かり。かゝれば、只昔の人をのみ戀ひつゝ、舟なる人のよめる、

寄する浪うちも寄せなん吾戀ふる人わすれ貝おりて拾はん

といへれば、ある人のたへずして、舟の心やりによめる

忘貝拾ひしもせじ玉を戀ふるをだにも形見とおもはん

となんいへる。女兒のために、は親をさなくなりぬべし。玉なちずもありけんをと、人いはんや。されども死にし子かはよ

かりきといふやうもあり。

猶同じ所に日を經る事をなげきて、ある女のよめる歌、

手をひでゝ寒さも知らぬ泉にぞ斟とはなしに日頃經ける

五日、今日からくして、和泉の灘より、小津の泊をれふ。松原めもはるゝ〳〵なり。かれこれ苦しければよめる歌、

行けどなほ行きやられぬは妹がうむをづの浦なる岸の松原

かくいひつゝくるほどに、舟とくこげ、日のよきにともよはせば、楫取、舟子どもにいはく、御舟よりおほせたぶなりあさきたのいでこぬさきに綱手はや曳けといふ。このことばの歌のやうなるは、かぢとりのわれのづからの詞なり。かぢとり

はうつたへに、われ歌のやうなる事いふことにもあらず。聞く人の、あやしく歌めきていへるかなとて、かきいだせれば、げに三十文字あまりなりけり。今日浪あたちそと、人々ひねもすにいのるしるしありて、風波たゝず。今しかもめむれゐてあそぶところあり、京のちかづくよろこびのあまりに、あるわらはのよめる歌、

祈りくる風間と思ふをあやなくも鷗さへだに浪と見ゆらん、

といひてゆくあひだに、石津といふところの松原おもしろくて漕べとはし。また住吉のわたりを漕ぎゆくあるひとのよめる、

今見てぞ身をば知ぬる住の江の松よりさきに吾は緯に

けり

こゝにひがしつ人の母、ひと日片時も忘れねばよめる、

住の江の舟さしよせて忘草しるしありやと摘みて行くべく

となん。うつたへに忘れなんとにはあらで、戀しき心地しばしやすめて、又も戀ふる力にせんとなるべし。かくいひて、ながめつゝ來るあひだに、ゆくりなく風ふきて、こげどもこげども、しりへしぞきにしぞきて、ほと〳〵しくうちはめつべし。揖取のいはく、かの住吉の明神は、れいの神ぞかし、ほしき物ぞおはすらん。とはいとめくるものか。さて幣をたいまつり給へといふにしたがひて、幣たいまつる。かくたいまつれども、もはら風やまで、いやふきに、いやたちに、風浪のあやふけ

れば、揖取またいはく、幣には御心のゆかねば、御舟もゆかぬなり、猶うれしと思ひたぶべき物、たいまつりたまへといふ。又いふにしたがひていかゞはせんとて、まなこもてそ二つあれ。たゞ一つある鏡をたいまつるとて、海にうちはめつれば、くちをし。されば、うちつけに、海は鏡のごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

千早振神の心のあるゝ海にかゞみをいれてかつ見つるかな

いたく住の江のわすれ草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。めもうつらゝ、鏡に神の心をこそ見つれ。かぢとりの心は、神の御心なりけり。

六日、みをつくしのもとより出て、難波の津をさして、河尻にいる。みな人々をんなをさなきもの、ひたひに手をあてゝ、よろこぶことふたつなし。かのふなゐひの淡路の島のねはひ子都近くなりぬといふをよろこびて、船底より、頭をもたげさせて、かくぞいへる。

いつしかといぶせかりつる難波潟蘆漕そけて御舟來にけり

いと恩ひの外なる人のいへれば、人々あやしがる。これがなかに、こゝちなやむ舟君ぞ、いたくめでゝ、舟酔したまひしみかはには、似ずもあるかなといひける。

七日、今日は川尻に、舟入りたちて漕ぎのぼるに、川の水ひてなやみわづらふ。舟ののぼる事いとかたし。かゝるあひだに舟君のやまうど、もとよりこちゝしき人にて、かうやうの

事、更にしちざりけり。かゝれども、淡路のたうめの歌にめでゝ、みやこぼこりにもやあらん。辛くして、あやしき歌ひねりいだせり。そのうた、

きときては川のほり江の水を淺み舟も吾身もなづむ今日哉

これはやまひをすればよるめなるべし。ひと歌にことのあかねば、今ひとつ、

とくと思ふ舟なやますはわがために水の心の淺きなりけり

この歌は、都近くなりぬるよろこびにたへずして、いへるなるべし。淡路のこの歌に劣れり。ねたくいゝざらましものをと、くやしがるうちに、入りてねにけり、

八日、なほ川のほりになつみて、島養の御厨といふほとりにとゞまる。舟君れいの病ねこりて、いたくなやむ。ある人いさゝかなる物もてきたり。米してかへりごとす。男どもひそかにいふなり。いひばして鯛つるとや。かうやうの事、ところどころにあり。今日せちみすればもちひず。

九日、こゝろもとなきに、あけぬから、舟をひきつゝのぼれども、川の水のなければ、ねざりにのみぞねざる。このあひだに和田の泊の、あがれの所といふ所あり。米魚をどこへばおくりつ。かくて舟ひきのぼるに、なぎさの院といふ所を見つゝゆく。その院、昔を思ひやりて見れば、おもしろかりける所なり。しりへなる岡にも、松の木どもあり。中の庭にハ梅の花さけり。こゝに人々のいはく、これ昔名高くきこえたる所なり

惟喬のみこの御ともにて、故在原業平の中將の、

世中にたえてさくらの咲かざらば春の心はのどけからまし

といふ歌よめる所なりけり。今きようある人、所に似たる歌よめり、

千代經たる松にはあれど古への聲のさむさは變らざりけり

またある人のよめる、

君こひて世をふる宿の梅の花むかしの香にぞなほ匂ひける

といひつゝぞ、都の近づくを、よろこびつゝのぼるかくのぼる人々の中に、京より下りし時に、みな子どもなかりき。いたれりし國にてぞ、子生めるものどもありあへる。なみ人、舟のとまる處に、子をいだきつゝおりのぼりす。これを見て、むかしの子の母、かなしきにたへずして、

なかりしも有つゝ歸る人の子を有しもなくて來るが悲しさ

といひてぞなげきける。父もこれをきゝていかゞあらんかうやうの事、歌好むとてあるにもあらざるべし。もろこしもこゝも。思ふことにたへぬ時のわざとか。こよひ宇土野といふ所にとまる。

十日、さはる事ありてのぼらず。

十一日、雨いさゝかふりてやみぬ。かくてさしのぼるに、東の方に山のよこをれるを見て、人にとへば、八幡の宮といふ。こ

れをきゝてよろこびて、人々拜みたてまつる。山崎の橋見ゆ。うれしき事限なし。こゝに相應寺のほとりに、しばし舟をとゞめて、とかく定むる事あり。この寺の岸のほとりに、柳おほくあり。ある人、この柳の、川の底にうつれるを見てよめる歌

さゞれ波よする綾をば青柳のかげの糸して織るゝとぞ見る

十二日、山崎にとまれり。

十三日、猶やまざきに、

十四日、雨ふる。今日車京へとりにやる。

十五日、今日車ゐて來れり。舟のむつかしさに、舟より人の家にうつる、この人の家よろこべるやうにて、あるじしたり。この主人の、またあるじのよきを見るに、うたてれもはゆ。いろ

〻にかへりごとす。家の人のいでいり、にくげならずゐやゝかなり。

十六日、今日の夕つかた、京へのぼるゆいでに見れば、山崎のたなたる小櫃の繪も、まがりのはらのかたも變らざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へゆくに、島坂にて、人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなりたちてゆきし時よりは來る時ぞ、人はとかくありける。これにもそれにもかへりごとす。夜になして、京には入らんと思へば、いそぎしもせぬほどに、月いでぬ。かつら川月のあかきにぞ、わたる人々のいはく、この川、飛鳥川にもあらねば、淵瀬さらに變らざりけりといひて、ある人のよめる歌、

ひさかたの月におひたる桂川そこなる影もかはらざり

けり

またある人のいへる、

あまぐものはるかなりつる桂川袖をひでゝも渡りぬるかな

またある人のよめる、

桂川わが心にもかよはねどおなじふかさにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞおはかる。夜ふけてくれば、ところ〳〵も見ねず。京にいたりて門にいるに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家をあつけたりつる人の、心もあれたるなりけり。中垣こそあれ。一

つ家のやうなれば、のぞみてあつかれるなり。されば、たよりごとに、物もたねずねさせたる、こよひかゝる事と、こわだかにものもいはせず。いとはつらく見もれど、心ざしはせんとす。さて池めいて、くぼまり水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年やすぎにけん。かた枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる大方みなあれにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひいでぬ事なくてひしきがうちに、この家にて生れし女子のもろともに歸らねば、いかゞはかなしき。舟人もみな子いたゞきてのゝしる。かゝるうちに。なはかなしみにたへずして、ひそかに心知れる人と、いへりける歌、

うまれしも歸らぬ物をわが宿に小松のあるを見るが悲

しさ
とぶいへる。なほあかずやあらん。またなん、
見し人を松の千年に見ましかば遠く悲しきわかれせま
しや
忘れがたくくちをしきことおほかれど、ねつくさず。とまれ
かくまれ、とくやりてん。

土佐日記終

明治三十年四月廿五日出版
仝　年四月三十日發行
正價金拾弐錢
發行者　高知市種崎町九十八番邸　片桐猪三郎
印刷者　大阪製本印刷株式會社　矢野松之助　大阪市西區阿波座一番丁六十番屋敷
發賣者　高知市本町二百番屋敷　片桐仲雄
發賣者　高知市本町四十番屋敷　片桐直吉

版權所有

發行書林　高知市種崎町　開成舍本店

發賣書林　高知市本町下一丁目　開成舍第一支店

發賣書林　仝本町三丁目　開成舍第二支店

高知市種崎町　澤本吉
仝　仝　山中專助
仝　本丁筋　小川代次
仝　香美　赤岡町　村田榮平
仝　野市町　廣瀨運助
仝　山田町　森本書店
仝　中村町　阿部書店
幡多　吾川　伊野町　岡田桝次

安藝郡安藝町　岡村直太郎
仝　仝　須藤龜七
高岡郡高岡町　三田要吉
仝　佐川町　官下利太郎
仝　仝　牧野龜太郎
仝　久禮町　大谷泉
長岡郡後免町　小川書店
仝　仝　山下支店
仝　本山町　高橋書店
幡多郡岸本村　中澤平太郎店

新發行書目

日本叢書

一冊讀切
續々發行

第三版出來せり

土陽新聞記者富田幸次郎君序
土佐丸事務員阪本喜久吉君著

●日本叢書第一冊

雲海紀行

一名土佐丸歐洲航行記

正價拾貳錢
郵稅四錢

本書は出版以來日尚淺しと雖も已に三版を重ねぬ
嗚呼三版？？？能く本書の眞價を説明して余あり、海國の丈夫后れて悔る勿れ

雲海紀行批評

●讀賣新聞批評　本書は歐洲航路の第一先登船たる土佐丸の航海紀事にして香港、錫蘭、孟買、倫敦、アントウエルプ等の商業工業を叙するとなる審かなり歐洲航路の一班を知るは便利ならん

●東京日々新聞批評　著者は郵船會社土佐丸の事務員にして歐洲航路の開始と共に萬里鵬程の壯遊を試みし到る處の見聞を錄せしもの即ち此書なり其紀する處尋常風流の旅行記にあらず頗る事務に補ひあり偶々德富蘇峯の西遊漫筆に酷似するものあるは蓋し同一の船、同一の地、同一の情あるに由るなるべし又近日の快文字なり

●東京朝日新聞批評　日本郵船會社歐洲航路開始の第一先登船たりし土佐丸事務員として同船に乘組みし阪本喜久吉氏の航海中見る處を記して土佐の土陽新聞に寄送したるを輯錄し一冊子となせるもの即ち香港、錫蘭、孟買、龍動、アントウエルプ、地中海等同船の航路及び寄港の各名地に戰勝國の旭旗に對し彼等が如何に歡迎の意を表し全船の如何に名譽を施したるやの詳況を見るべし

●國民新聞批評　本書は土佐の阪本なる人歐洲航海第一先登の土佐丸に事務掌理員として乘組み到る處香港より錫蘭コロンボ孟買より龍動よりアントウエルプより地中海より發信したる紀行見聞錄にして文字亦見るに足る購讀の價値充分ならん

●萬朝報批評　著者阪本氏が郵船會社歐洲初航海の土佐丸に搭せる即ち雲海紀行なり行文流暢快誦すべし

●日本新聞批評　歐洲航路開始の際土佐丸の事務員なる阪本喜久吉氏

が土陽新聞に通信せし者を蒐集せし書なり壯快なる航路の景況見るが如し

●中央新聞批評　歐洲航海の第一先登船なる、土佐丸事務員阪本氏の詳密なる紀行なり文字流麗人をして倦ざらしむ

●土陽新聞　印度洋上急潮澎湃たり地中海邊江濤浩渺たり鐵輪遠く萬里の波を截り英京倫敦に初めて日東の旭旗を飜へしたるもの實に日本郵船株式會社の土佐丸なりとす社友阪本喜久吉氏曩きに歐洲航行記を我土陽新聞に寄せられ紙上幾多の光彩を添へて讀者の喝采を博せし處なるが書肆開成舍這般之れを編輯して一部の書冊となし題して雲海紀行と云ふ其行文の健雅にして且つ其觀察の奇拔なるは既に讀者の識る處今言ふを要せず表裝美麗賣價又低廉眞に好個の一小冊子なり今や秋夜耿々として燈下可親の候若し夫れ短檠の下此書に對するあらは一條の遊魂脉々として天外遠く雲海縹渺の間に馳するものあらん

●高知日報　本書は日本叢書として東京市神田區表神保町東京堂より發賣を始めたるが日本郵船會社歐洲航路開始第一先登船土佐丸に乘渡し航したる本縣長岡郡種崎村の人阪本喜久吉氏の通信を蒐集したる者にして身其實境に在る如く國民に海事思想を喚發せしめ頗る裨益ある冊子なり

●高知毎日新聞　雲海紀行は日本叢書第一冊として此程當市開成舍より發行せらる本書は土佐丸事務員阪本喜久吉氏が歐洲航行の途次香港

「錫蘭、孟買、龍動、アレトッーブ、地中海等より當地に寄送したる紀行を輯錄したる者にて一讀人をして壯快を感せしむ

●其他京阪各地新聞批評有れど略す

阪本喜久吉君著（雲海紀行續篇）

●日本叢書第二冊　歐洲再航錄　八月發行

卜松榮次郎君著

●日本叢書第三冊　南洋探檢紀行　八月發行

寺石正路先生著

●日本叢書第四冊　間居雜筆　九月發行

一冊讀切　續々發行

土陽叢書

土陽叢書大定目

●土陽叢書第一冊　土藩大定目　正價拾貳錢　郵稅貳錢

●國民新聞批評　封建時代土佐藩の諸法令を蒐めたるものにて目錄凡そ三拾九件あり史家の參考に足るべし

●土陽新聞批評　今回開成舎に於て土陽叢書を刊行するの舉あり土藩大定目は其第一冊として出でたるものなり之れを題するに藩政中の法令一括して此の中にあり綱目三十九、政務家、實業家、考古家等孰れも藩の資に供すべし

●日本新聞批評　舊土洲藩の掟を集めたり史料となすべし

●中央新聞批評　土陽叢書第一冊として出づ維新前土州藩の百般の法律定目を網羅せり史家の參考たるべし

●萬朝報　數年前長州の有志が協力して「防長文庫」と云へるを刊行し遡古知新の料に供るを見しがこれは高知の諸有志が同じ志望を以て行せるものと覺しく即ち土陽叢書の第一卷にして異邦境外の人には大の趣味を覺へしむされば逐次秘書を上梓せば自然に土佐歴史を完成することなるべし蓋し美舉なり

●東京日々新聞　土陽叢書第一冊として發行するもの土藩の法令政度も網羅して遺すなし

土陽叢書第一冊　山内武功

正價拾貳錢　郵税　貳錢

本書は天下麻の如くに亂れし天正慶長の頃千軍万騎の間に馳驅し彈矢雨注の中に出入して武勳赫灼遂に土國に封せられたる藩祖一豐公の武勳記事なり附するに臣僕の公矢石の間に從ふて奮戰格鬪せる經歴を併記せしものにて今般土陽叢書第二冊として發行せり諸ふ御購求あらんことを

●土陽新聞批評　山内武勳　書肆開成舎近時出版事業に力を致し曩に土陽叢書を發刊し專ら我海南の史料を天下に紹介せんとし既に土藩大定目を公にせしが今次くに山内武功を以てす本書は天正慶長の際に於ける藩祖一豐公の武功を編纂蒐集せるもの行文趣味に乏しと雖も材料豐富以て修史の資となすに足るものあり

●高知日報　批評山内武功　山内一豐公御誕生より始まり土州御下屋敷にて御急症にて御遠行迄ての間に於ける種々の武功を記したる頗る有益の著者なり他日史家の武功傳を編せん時は必ず此書に其基礎を取らざるを得ず

●毎日新聞　批評山内武功　土陽叢書第二冊として此程當市開成舎より發行せり我舊藩祖一豐公の御誕生より御逝去に至るまでの御武功御任官其他の事蹟を細大洩さず録記に準據し編年体に編りたるものにして表裝亦美麗なる好冊子なり

●福島鷗波氏批評　山内武功　山内家子先祖か土佐へ封を受くる前后の事にして其著何人たるを知らずと雖も久さしく筐に埋れ蠹魚を養ひしも今回の出版を得たる蓋し山内家の武功を發揚し著者の心勞を千古に示すに足るべし開成舎の事業は學者に裨益を與ふる而已ならず寧ろ

山内家に忠なるものなり
土陽叢書第三冊第四冊
寺石正路先生著

考古遺寶

洋綴小形全二冊
正價 各拾貳錢
郵稅 四錢

本書は土佐國の風俗、美術、人物、工業、古跡、骨董等に關する歴史上の實談を採錄せる者にして文章明暢に材料貴重なる一々精金美玉の如く土佐國の古實を知り歴史を窺はんとする者は一日も座右に欠くべからざる良書なり請ふ御愛求を玉へ

福島鶴波君著
土陽叢書第五冊
紀貫之

正價金拾貳錢
郵稅 四錢

茨木定興先生
安達正晴先生
評序跋

寺石正路先生著
土陽叢書第六冊
土佐古跡巡遊錄

八月發行

寺石正路先生著
土陽叢書第七冊
土佐人物傳 上卷

八月發行

土陽叢書第八冊
土佐人物傳 下卷

九月發行

福島鶴波君著
土陽叢書第九冊
土佐遺跡志

十月發行

土陽叢書拾編以下は諸先生の編輯中なれば不日廣告すべし請ふ之を諒せ

●土陽叢書第九冊
松野尾儀行君著

土佐沿革史

近刊

●再版

南海之偉業

正價貳拾五錢
郵税四錢

實業自由新聞批評　野中兼山一世記

一名野中兼山は元和元年を以て播州に生る其土佐に入りて絶大の土功を起し余澤を后昆に貽す其功業事蹟之れを備の藩山に比して尚は凌駕する處あり盡し彼は君侯の奇遇を得て其終を全くせし也は末路の艱苦に陷りて其終を全くせず彼は隆文の時に際し此は偃武の始に於てす其難易輕重固より同日の論に非ず此書は松野尾章行翁儀行兩君の編輯する處にして兼山一代の事業を悉くせり卷首には兼山の書翰を拜し諸名家の題跋を附す經世家の一讀を要すべき良書と

河田小龍翁著書

●土佐十景

吸江圖志

正價拾貳錢
郵税貳錢

我海南畫家の泰斗として其名八紘に轟き三尺の童子と雖も知得するは夫れ河田小龍先生にあらずや先生は我吸江十景の歌を逐ふて古蹟の埋沒するを遺憾とせられ明治十一年本書を著述せられ諸先生の題字序跋詩文和歌等を掲載し資金を容さず密畫彫刻を以て出版せられたる良書

にして先生が得意の密畫と印刷の鮮明とにより非常の好評を得暫時に賣切となり今尚は購讀者あるも先生他國せられ再版する余暇なし或翁深く之を遺憾とし弊店へ向け勸告せられたれば直ちに是れを先生に懇請せり營利的の先生にあらざれば早速に承諾の榮を蒙り今般弊店に於て出版し廣く發賣せんとす江湖各位續々御注文あらんことを

野口寧齋　題詞
溟滄　宇田友猪著

龍上偶語

八月中に發行
正價金貳拾五錢
郵税金四錢

松野尾章行翁製圖

高知市街圖

石版彩色刷美製全一折
正價　金五錢
郵税金　貳錢

本圖は有名なる松野尾翠軒翁の製する處にして正確詳密なる事は弊店の喋々を要せず是迄で世に有ふれたる木版製の誤謬多き地圖と同視する勿れ

7/
329/12

開成舍